

タンホイザーとゲルマン信仰 ——「地獄の女神ヴィーナス」の素顔——

溝 井 裕 一

0. はじめに

リヒャルト・ワーグナーがオペラのために書き上げた物語『タンホイザー』は大変な人気を博し、現在でも再三上演されている。このオペラのモチーフとなったのは、中世に実在し、謎の失踪を遂げたという騎士タンホイザーにまつわる伝説である。

タンホイザー伝説には、ローマ神話の女神ヴィーナスが登場する。彼女はタンホイザーを肉体的快楽に誘惑するが、タンホイザーはそれを罪と感じ、逃れようとする。この伝説を扱ったのは、ワーグナーだけではなく、ドイツを代表する文学作家であるハインリヒ・ハイネもまた、タンホイザー伝説をとりあげて文章や詩を書いている。

愛の女神ヴィーナスは、タンホイザーの話には欠かせない登場人物である。ワーグナーのオペラでは、ヴィーナスはひたすら「邪悪な快楽」¹とか「地獄の魔法使い」²といった否定的な言葉で彩られている。ところが、ハイネの描くヴィーナス像は、それと違って実にポジティブなものであり、邪悪とか魔術などという言葉ではほとんど表現されない。同じドイツ出身である文人の、しかもそれほど時代の遠くない作品で³、ヴィーナスの姿がかくも異なるのはどういうわけであろうか⁴。

1 Wagner, Richard: Tannhäuser. Stuttgart: Philipp Reclam Jun, 1967, S. 55.

2 Wagner, Richard 1967, S. 57.

3 ハイネが『精霊物語』を書いたのは1835-36年。ワーグナーの『タンホイザー』の初演がおこなわれたのは、1845年であった。

4 ハイネとワーグナーのタンホイザー像を知るきっかけとなったのは、西村京子氏の『「グリム童話」の魔女たち』（1999年、洋泉社）であった。そのことを記して、ここに謝意を表したい。

私はドイツ文化を研究する立場から、このヴィーナスという女神が従来どのような性格を持っていたのかを確認したい。それからあらためて、2つのヴィーナス像を検証しようと思う。そうすることで、タンホイザー物語におけるヴィーナス像に対する、より深い解釈が可能となるであろう。

1. タンホイザー伝説

ハイネやワグナーが参考にしたタンホイザー伝説は、もとは中世に由来するものであるという。

グリム伝説集に収録されている話によれば、タンホイザーは、愛の女神ヴィーナスが住む山のなかで快楽にふけっていたが、あるとき罪の意識を覚え、ヴィーナスのもとを去ってローマへ懺悔の旅に出る決意をする。ヴィーナスは彼の申し出になかなか応じようとしなかったが、タンホイザーは聖母マリアの名を叫ぶことで、何とか脱出に成功する。しかしタンホイザーがローマ教皇のところへ行き、罪を告白したところ、教皇は自分の杖から枝葉が生えでもしないかぎり、タンホイザーの罪は赦されることがないと宣告する。キリストによる救済の望みを絶たれたタンホイザーは、結局ヴィーナスのもとへ帰ってしまうが、そのあとで教皇の杖から、実際に芽がふきはじめる。タンホイザーが神の許しを得たことを知った教皇は、あわてて方々に使者を送るが、あとの祭りで、彼はとくに姿を消していた⁵。

この伝説はハイネやワグナーに限らず、多くの作家を魅了した。快楽の女神ヴィーナスと、キリスト教の救いのあいだでゆれうごくタンホイザーの姿は、彼らに格好の題材を提供したことだろう。

現代の私たちがヴィーナスと聞いて連想するのは、美や愛、快楽の女神というイメージである。そしてこのイメージは、タンホイザー伝説やワグナーの戯曲に登場するヴィーナスにもそのままあてはまる。ワグナーの話では、ヴィーナスはほとんど悪魔と同列に扱われている。もちろん、原罪を説くキリスト教にとって肉体的快楽は罪であるから、キ

5 Vgl. Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: Deutsche Sagen. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1994, S. 218f.

リスト教的世界観から見ればヴィーナスは悪であっても不思議はないということになる。

しかし、キリスト教を受け入れる前のヨーロッパ人にとって、美と愛の女神というのがヴィーナス像のすべてであったのかというと、そうではない。この女神はもともと、豊穡や多産を助けるという役目を持っていたのである。

2. 愛の女神ヴィーナスとは

・ヴィーナスの原型アフロディテ

古代ローマ神話に由来するヴィーナスは、絶世の美女であり、愛や美の女神ということになっている。この女神がそうした性格を持つようになったのは、ギリシア神話の女神アフロディテの影響を受けたからだと言われている。アフロディテの性格を受け継ぐ前は、ヴィーナスは農耕の神であった⁶。

ギリシア神話によれば、アフロディテは、天空の神ウラノスの男根が地中海に落ちたときに生じた泡から誕生したという⁷。この話は、アフロディテという女神の本来の性格を現している。アフロディテは、多産や豊穡をつかさどる神なのである。また同時に、アフロディテは海の神、天候の神であり、死者の神でもあった⁸。それが、ギリシア神話の洗練にもなって、美しい容貌と好色さのみが強調されるようになったのである。

アフロディテはまた、同じく豊穡の神であるプリアポスと親子関係にある。古代の信仰では、男女の豊穡の神が一緒になっている場合が多いという。プリアポスは男根が異様に巨大化した姿で描かれたり、あるいは男根そのものとしてもあらわされるが、中世の悪魔像にも少なからぬ影響を及ぼした。

6 楠見千鶴子：『ギリシア神話物語』、講談社、2001年、69頁参照。

7 Vgl. Martin, Richard P: Myths of the ancient Greeks. New York: New American Library, 2003, S. 24f.

8 Vgl. Gruppe, Otto: Griechische Mythologie und Religionsgeschichte, Zweiter Band. New York: Arno Press, 1975, S. 24f.

おなじギリシア神話に登場する女神のなかで、有名なものにアルテミスがある。アルテミスは、しばしば弓を手に森をかけまわる処女神として表現されるが、ナポリの考古学博物館には、このイメージとはかけ離れたアルテミスの彫像が展示されている。その彫像は、多数の乳房を全身につけているのである。アルテミスもまた、豊穡の女神としての役割を担っていた⁹。

・ゲルマンの女神たち

古代のケルト人やゲルマン人もまた、いく人かの女神を崇拝していた。ただギリシア神話やローマ神話に比べて、ゲルマンの女神についてはあまり多くが伝えられていない。ルドルフ・ジメークによると、さまざまな女神の名前のリストがあるにもかかわらず、個々の姿がどのようなものであったのか、ほとんどわかっていないという¹⁰。それでもフレイヤ、ヴァルキューレ、ノルネ、マトローネなどは、その姿を多少はつかむことが可能である。そしてこれらの女神のどれもが、多かれ少なかれアフロディテと同じような性格を有している。

北欧神話のなかで、フレイヤは女神としてもっとも名声があったといわれるが、エッダなどにおいて、ヴィーナスやアフロディテのような恋多き神としてとりあげられている¹¹。だがフレイヤも、もとは地母神としての性格を備える豊穡の神であった。

フレイヤはまた、戦死者の魂の半分を受けとるといわれているが¹²、他のゲルマンの女神たちも、多かれ少なかれフレイヤと重なる領域をつかさどっていた。例えば戦いの神であるヴァルキューレは、戦死者の魂

9 Vgl. Brockhaus: Brockhaus-Enzyklopädie in 24 Bänden, Band2. Leipzig-Mannheim: F.A. Brockhaus, 1996, S. 164.

10 Vgl. Simek, Rudolf: Götter und Kulte der Germanen. München: Verlag C.H.Beck, 2004, S. 16.

11 Vgl. Simek, Rudolf 2004, S. 81.

12 H.R.エリス・デヴィッドソン（米原まり子、一井知子訳）：『北欧神話』、青土社、1997年、178頁参照。

を集めるとされている¹³。

大地を支配するのみならず、死者をも受けとるフレイヤやヴァルキューレの性格は、これらの女神が地下世界の住人でもあることを示唆している。

ドイツの民間伝承では、ペルヒトやホレといった魔神的な女性たちが登場する。彼らは善悪両方の性格を持っており、報酬を与えることもあるが罰することもあり、祝福を与えるが呪いもかけ、命を与えることもあるが逆に奪うこともある¹⁴。伝説では、ペルヒトもホレも、荒ぶる死者の軍勢を率いてかけまわるといふ¹⁵。死者の魂を扱うという点で、彼らがフレイヤやヴァルキューレなどの女神に似た性格を持っていることは事実である。

グリム・メルヒェンには『ホレおばさん』という有名な話がある。『ホレおばさん』では、少女が血のついたつむを洗っているときに、あやまって井戸に転落してしまうが、その奥には美しい世界が広がっていて、ホレという名の女性が住んでいる。ホレおばさんは、まじめに働いてくれた少女に贈り物をして、また地上の世界に帰してやるが¹⁶、井戸の奥に広がっていた地下世界は、ゲルマン人の信じていた冥界なのである¹⁷。

ケルト人もまた、これとほとんど同じ世界観を持っていたために、泉や池に供え物を沈める風習を持っていた¹⁸。ケルト・ゲルマン人が崇拜していた泉、石、木などは、どれも地下世界と密接な関係を持ってい

13 Vgl. Simek, Rudolf 2004, S. 82f.

14 Vgl. Bächtold-Stäubli, Hanns (Hrsg.): Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Band6. Berlin: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG, 10785, 2000, S. 1485.

15 Vgl. Bächtold-Stäubli 2000 (Band6), S. 1478ff.

16 Vgl. Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: Kinder und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, Band1. Stuttgart: Philipp Reclam jun., 1980, S. 150ff.

17 このメルヒェンでホレが娘を地上に帰してやるということは、彼女が再び娘に命を与えたことを意味する。

18 Vgl. Demandt, Alexander: Die Kelten. München: Verlag C.H.Beck, 2002, S. 39.

る¹⁹。

後にキリスト教が流入すると、ケルト・ゲルマン人にとって大切であった地下世界は、そのまま地獄ということになり、そこに住む女神たちも悪魔に変えられた。

ハイネはそのいきさつに大きな関心を持っていたので、『精霊物語』や『流刑の神々』のなかで、キリスト教によって悪魔化された古代の神々の姿を描いている。ワーグナーもまた、このことを知らなかったわけではないであろう。なぜなら彼の『タンホイザー』では、ヴィーナスがキリスト教に改宗した人間の前から、姿を隠さねばならなかったことを嘆いているからである²⁰。

タンホイザー物語では語られることがないものの、古代の女神たちにはもうひとつの能力、すなわち予言の力が備わっていた。これは死者を受け入れ、また生ける者を生み出すからには、その運命をも決定することができると信じられていたためではなかろうか。

運命の女神という性格が特に色濃いゲルマンの神は、ノルネと呼ばれる3人の神々である。彼らには少なくとも未来を決定する力、あるいは予言の力が備わっているとされていたらしく、子どもの生まれたときに、良きことと悪きことを前もって決めると考えられていた。中世のVölspáという資料によれば、彼らはそれぞれ「ウルト、ヴェルダンディ、スクルド」すなわち「過去、現在、未来」という名を持っているという。彼らはまた、中世アイスランド文学では、女性予言者や魔女などとも関連させられているらしく²¹、歴史における女神像の変遷がうかがえる。

またノルネとよく似たマトローネという3人の女神は、イギリスやガリア地方に住んでいたケルト人や、一部のゲルマン人の間で崇拝の対象になっていた。この地域がローマ帝国に占領されていたころ、マトローネの石像は大量に作られているが、その多くを今ではケルンのローマ・

19 ホレの居場所として泉、沼、石、木、そして山などが挙げられていることは、注目に値する。ホレのいる泉から子どもがやってくると、しばしば信じられていた。

Vgl. Bächtold-Stäubli 2000 (Band 6), S. 1482f.

20 Vgl. Wagner, Richard 1967, S. 23.

21 Vgl. Simek, Rudolf 2004, S. 83.

ゲルマン博物館で見ることができる。

マトローネは母神的な神であり、その彫像が果物の入ったかごや豊穡の角²²、あるいは包まれた幼児をかかえていることがある²³。この女神もやはり豊穡と関係しているが、おそらくノルネと似た予言や運命決定の能力も有していたであろう。

ここまで見てきたように、ギリシア・ローマ神話、ゲルマン神話を問わず、女神たちは豊穡や生殖と密接なかかわりを持っている。後の快樂の神というヴィーナスのイメージが、そこに由来しているのは明白であろう。キリスト教から見れば、ヴィーナスは性行為にばかり精を出している悪魔的存在ではあっても、人の死亡率の高かった古代社会にとって、性の営みは罪どころか、真剣かつ大切なものだったはずである。その上、人の生き死にをも決定する力を持つ女神の役割は、もとはかなり重要なものであったにちがいない。

ドイツで生まれたタンホイザー伝説で、ゲルマンの女神の代わりにヴィーナスが登場するというのは少し奇異なことで映るかもしれない。しかし、北欧の神々と地中海の神々は互いに影響し合い、融合することもしばしばであった。ローマ帝国時代には、ローマ人が自分たちの神々を直接持ち込んでみいる。豊穡の女神ヴィーナスは、ゲルマン人にとってそれほど異質なものではなかったから、フレイヤをはじめとするゲルマンの女神との融合も、容易であったにちがいない。ペルヒトやホレも、ヴィーナス山の住人としてしばしば扱われるという²⁴。ドイツの伝説にヴィーナスが登場するのは、それほどおかしいことではないのである。

3. ハイネ、ワーグナーのタンホイザーとヴィーナス

伝説に描かれるタンホイザーとヴィーナス、そしてローマ教皇の姿は、ヨーロッパにおける古代信仰とキリスト教の関係をj知る上で多くのことを示唆してくれる。

22 花や果実が盛られた山羊の角である。

23 Vgl. Vries, Jan de: Keltische Religion. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag, 1961, S. 121.

24 Vgl. Bächtold-Stäubli 2000 (Band 6), S. 1483.

古代ケルト人やゲルマン人、特にケルト人の自然信仰では、死と生の境界があいまいであり、その間を往復することができる。ケルト人を制圧したユリウス・カエサルは、ケルト人が魂の不死を熱烈に信じて、戦いのさいにまったく死を恐れなかったと報告している²⁵。『ホレおぼさん』や他のメルヒェンで、主人公があゝの世とこの世をさも当然のように往復できるのは、これらの話が古い世界観を背景にして作られたからである。

ケルト・ゲルマン人の死生観にとって、大切なのはあゝの世における暮らしではなくて、この世の暮らしである。地下世界は、生まれ変わりの準備をするための場所にすぎず、死は、何度も連続する生のターニングポイントにすぎない。

だがキリスト教が目指すのは、神による救済であり、天における永遠の暮らしである。そのためにキリスト教徒は、この世に執着しないのを旨とする。ワーグナーの戯曲のなかで、キリスト教徒であるタンホイザーがヴィーナスに向かって「おお女神よお察してください、憧れが私を死へと駆り立てるのです！」²⁶と叫ぶ。しかし女神はそれを受け入れようとしない。ヴィーナスにとって、現世の方がずっと大切なのであり、タンホイザーのいうことが理解できないのである。

ワーグナーとハイネという、2人の文人がそれぞれ描くヴィーナス像は、この女神の受容がヨーロッパにおいて多様であることを示している。

ワーグナーのオペラ『タンホイザー』では、ヴィーナスはタンホイザーを快楽の罪に導く魔物として現われる。彼はヴィーナスと接したために、周りの人びとから冷たくあしらわれ、教皇からも罪の赦しを得ることができない。タンホイザーを救うのは、純粋な少女エリーザベトである。エリーザベトの登場はしかし、タンホイザー伝説ではまったく語られておらず、ワーグナーの創作である。このエリーザベトとタンホイザーの死によって、快楽の罪は赦しを得るが、ヴィーナスの方は最後まで「地獄の女神」というレッテルを貼られたままである。

25 Vgl. Demandt: Die Kelten 2002, S. 38.

26 Wagner, Richard: Tannhäuser. Stuttgart: Philipp Reclam Jun, 1967, S. 26.

しかしハイネが書いた詩になると、ヴィーナス像は大きく異なる。ハイネの描くヴィーナスは、美しいだけでなく気立てがよい女神である。ここでもタンホイザーは一度ローマへ懺悔の旅にいかうと決意するものの、教皇の前で逆にヴィーナスを賞賛してしまう。「彼女はかくも健康に、うれしげに、すてきに笑います。そしてその白い歯ときたら！あの笑いを思い出すたび、突然涙があふれてくるのです」²⁷。

ワーグナーとハイネの物語で大きく異なるのは、ワーグナーのタンホイザーが死後の天国における生活を重視するのに対し、ハイネのタンホイザーが現世指向を持つことである。ハイネのタンホイザーは、最後にこういう。「私は今やヴィーナス山の、わが美しい妻のもとを離れまい」²⁸。あの世での生活がどうであろうと、大地の懷にいたほうがよい、というのである。ハイネに現世思考のタンホイザーが描けたのは、やはり悪魔化された神々に深い理解があったためであろう²⁹。

4. おわりに

今回のマルジナリアでは、タンホイザーの伝説や物語に登場するヴィーナスという女神の源流をたどり、その本来の姿が後世どのように変化してきたのかを検証した。

古代ギリシア・ローマ神話、北欧神話などに登場するヴィーナスやアフロディテ、そしてフレイヤなどの女神は、もとは多産と豊穡をつかさどる神であった。北欧神話のノルネや、ケルトの女神マトローネなどは、豊穡のみならず運命をもつかさどる女神として登場する。だが大半の女神が、大地と結びつけられているという点では疑いの余地がないであろう。

こうしたさまざまな女神たちは、ヨーロッパにキリスト教が流入した

27 Heine, Heinrich: Heinrich Heines sämtliche Werke, Band7. Leipzig: Insel-Verlag, 1910, S. 424.

28 Heine, Heinrich 1910, S. 428.

29 ただし、この詩を書いた当時ハイネは、パリのマティルダという女性と同棲していた。彼のヴィーナス像には、この女性も影響していることを留意しておくべきである。

あと、信仰対象の位置から追い出され、魔女信仰に吸収されたり、タンホイザー伝説などの民間伝承や文学の題材にされた。魔女と関連づけられた場合、彼らは悪魔的な存在として扱われることが多かったが、伝承や文学では時には悪しきもの、時にはよきものとして表現されている。

ハイネやワーグナーが描くヴィーナス像もまた、作者によりその性格が若干異なる。ハイネの場合は、ヴィーナスを最初から最後まで肯定的に扱うが、ワーグナーのヴィーナスは、最終的に邪悪なものとして拒絶される。

しかしどちらの物語でも、タンホイザーを大地に引きとめようとするヴィーナスの態度は変わらない。ヨーロッパがキリスト教化の波を受けたあとでも、大地の女神の性格は脈々と受け継がれているのである。